

アンドレイ・ボロトフ研究の現在

——『ボロトフの手記，あるいは子孫のために自ら書いた
アンドレイ・ボロトフの生涯と出来事』を中心に

坂内徳明

目 次

- I. まえがき・前稿との関わり・本稿の目的
- II. 『手記』はどのような経緯で世に出されてきたか
 - 1. A. ボロトフの『手記』とは？
 - 2. 『手記』の存在確認
 - 3. 刊行への第一歩
 - 4. 「完全版」をめざして
 - 5. 20世紀における刊行
- III. テキスト『手記』にたいして，いかなるアプローチがとられてきたか
 - 1. 18世紀地方貴族の歴史資料
 - 2. 1920-1930年代のボロトフ像
 - 3. ボロトフ研究，苦難の継承，その頃アメリカで
 - 4. 1980年代以後，21世紀の現況
- IV. 新たなボロトフ理解に向けて

I. まえがき・前稿との関わり・本稿の目的

本稿筆者は、前稿で、18世紀後半から19世紀前半にかけてのロシアで最大の文人の一人であるアンドレイ・チモフェエヴィチ・ボロトフ（1738-1833）の生涯と彼の仕事について概観した⁽¹⁾。しかし、彼の生きた時代のロシア社会がきわめて激しく大きな変遷を遂げたこと、そして彼が長寿であったためだけでなく、著作ならびに営為（この場合には、著述をはじめ思索・読書・朗読のみならず、領地経営、農耕、造園、果樹観察、ジャガイモの栽培・普及、都市計画、社交、そして日々の生活全体までを含む、まさしくロシア語の творчество「創造」がふさわしい）がきわめて多くの領域にわたり、かつ、著作の量が膨大で質が高いことからすれば、「今後のボロトフ研究への誘い」と銘打った前稿の紹介は不十分で、書き足りなかったとの感が強く残った。むしろ、彼の関心分野のすべてを語り尽くすことなど不可能であり、その必要はない。むしろ、選択的かつ優先的に求められるのは、彼が生きた時代・社会と、彼個人の営為との関係をいかに捉え、記述していくのかを問うことであり、また、その関係性を理解し言語化するための理論と方法を明示化することである。

現代の個別・細分化した研究の「専門性」の立場からすれば、多岐にわたる彼の関心はいかに捉えられるだろうか。「地方」に籠って「趣味と余技」に明け暮れた素人研究者として、18世紀に顕著な「未熟で」かつオプティミスティックなディレタンティズムとして、ボロトフの学問的態度は切り捨てられるのではないか。しかし、知の秩序づけと体系化を志向すべき学の在り方そのものが根本的に問い直されるべき現代だからこそ、ボロトフの知的関心と、その在り様は問い直されてよいと考えられる。彼の仕事を再考察する意味はこの点にこそあるが、前稿ではその点にまで論及しなかった。

(1) 坂内（2013）。

このこととの関連で言えば、前稿で著者は彼を「エンサイクロペディスト」と呼び、論文の表題としましたが、それはいささか不用意だったと考える。むしろ、比喩的にそう呼ぶのは可能で、間違いないと言える素地はある。ボロトフ研究者の多くがその呼び名を使用してきたからであり⁽²⁾、人文・自然科学の多種多様な分野に幅広く関心を抱いた博物学的「18世紀人」の典型としてボロトフをイメージすることは、それほど大きな誤解でない。しかし、こうしたイメージに安住したまま、彼を「エンサイクロペディスト」と呼ぶことには慎重になるべきであった。

その理由は、ロシアの思想・精神史を振り返れば容易に理解できるのではないか。西欧社会がキリスト教ならびに神学に基礎を置いた中世の知的・精神的世界から、ルネサンスを経験することで「離陸」し、近世・近代的精神と文化の獲得によって近代的な知の体系化を目指したとすれば、ロシアの場合、知的・精神的世界はまったく別の過程をたどって展開していく。ロシア中世にあっては、世俗的文化が社会の表層へ「顕在化」することがほとんどなく、キリスト教のみに文化的価値の拠り所を置いていたはずの社会が「反乱の世紀」たる17世紀に世俗化と「混沌」を体験し⁽³⁾、18世紀に突入する中で *tabula rasa* 状態で西欧近代と直面せざるを得なかったからである。ロシアではルネサンスだけでなく、デカルト「経験」がなく、ロックもスピノザもライプニッツも「経験」しえなかった。したがって、18世紀ロシアが、近代の学問体系が未だ確立せず、そのディシプリンもジャンルも「未分化」で、明確に区分されない時代であったことは、ある意味で当然かもしれない。統合的な知の全体的把握と体系化という観点に立つならば、ロシアは何の準備も「前史」もなく、西欧近代の精神史

(2) 例えば、ボロトフを書物史の観点から研究してきたグラゴレヴァの論考（Глаголева, 1988）の他、トゥーラ郷土史家ガニチェフの著書の表題『トゥーラのエンサイクロペディスト』（Ганичев, 1986）等々。

(3) 17世紀半ば以降の文化的ダイナミズムと「地殻変動」に関しては、パンチェンコの仕事（Панченко, 1984）が刺激的である。

的課題を突き付けられ、即回答を迫られたのである。18世紀に入る間もなく、ロシアは「大慌て」で、かろうじてその端緒に辿り着いた、との印象はぬぐいきれない⁽⁴⁾。

むろん、ロシアは西欧をただ盲目的に受け入れ、模倣した訳でないことは言うまでもない。18世紀に始まる「西欧化」「近代化」の只中で、ピョートル大帝がライプニッツと二度面会し、彼の提言を受けた形で、クンストカマーならびに科学アカデミーを設立したこと⁽⁵⁾、そして、ロシアの地からも B. K. トレヂアコフスキイ、M. B. ロモノーソフ、H. M. カラムジン、A. H. ラヂーシチェフらが陸続と誕生していったという事実を想起するならば、時代状況は明らかである。その意味で、ボロトフを含めて18世紀半ば以降に複数の「エンサイクロペディスト」が登場したと考えることもできるかもしれない。だが、西欧における百科全書派の出現と比較したとき、スケールの点でも、社会的広がり・影響や受容のされ方から見ても、ロシアに百科全書派が存在したことは、この点はさらに検証が求められるべきだが、否定的にならざるを得ないのである。

(4) こうした言い方が「進化論的」西欧中心の言説をもたらす危険性につながることは承知している。「文化革命」としてのピョートル改革 (Cracraft, 2003) という理解が役立つかもしれない。

(5) ライプニッツとピョートル大帝、クンストカマーとの関係については、ブレーデカンブ (2010: 210-222) に詳しい。さらに、Николози (2007) を参照。ライプニッツにとってロシアは「いまだタブラ・ラサ状態であり、いわば手つかずのフィールド」であり、西欧ではただちに理解されなかった彼の科学技芸研究所 (科学芸術院) 設立の考えを実現する上で最高の実験場であった。ライプニッツはロシアにおけるこの「自然と人工の劇場」設立のための建白書・報告書等を1697年以降繰り返し書き送っている。私見では、科学アカデミー創立はロシアの「西欧化」の究極の形かもしれない。それがきわめて「孤立的」で「暴発的」な試みであったことがロシア文化の「宿命」だった。

本稿は、本来であれば、前稿に先立って書かれなくてはならなかった。まず、研究史をトレースすることによって問題の所在を検証・確定し、問題設定へと進むのが研究の「始まり」であり、「常道」とされるからである。その意味で、ボロトフの生涯と仕事（しかもその両者）をまず記述したことにたいしては、いささか勇み足の誹りを受けることはやむを得ないが、ボロトフの「生き様」（ロシア語の **быт**—生活様式、世態風俗、習俗、生活）というテキストの全体を「最初に」提示しておくべきであったとの考えに変わりはない。私的な言い方をすれば、著者のボロトフ「像」をどのような形であれ、原イメージとして素描したかったのである。

本稿の目的は、ボロトフ研究史のフォローにある⁽⁶⁾。その際、記述の中心となるのは、ボロトフの著作（公刊・未刊）の中核となる『手記』テキストの刊行ならびに研究のヒストリオグラフィである。19世紀半ば以降現在まで、断続的とはいえ精力的に継続されてきたボロトフ『手記』の公刊と研究そのものが、それぞれの時代における知的関心に明確に呼応する形で展開してきたこと、そして現在、さまざまなアプローチによって新たなボロトフ像の模索が行われていることを明らかにしたい。

II. 『手記』はどのような経緯で世に出されてきたか

1. A. ボロトフの『手記』とは？

ボロトフがその全生涯を通して残した膨大で多様な著作⁽⁷⁾の中でも、質量的に「豊穡」で、もっとも注目すべきものが彼の『手記』であるとする

(6) 前稿では、ボロトフ研究史を5段階に分けた（坂内、2013：57）。

(7) ボロトフが書き残した文書の分量は、文学史家のヴェンゲロフによれば「通常のフォーマットで350巻」というが、その根拠は示されていない。未刊も含むボロトフの著作目録は、Венгеров (1897), Афанасьев (1988), Боровских (1984), Степанов (1968) を参照。アーカイヴに関してはТолмачев (1992)。

ことに異論はない。『手記』の活字による刊行と、それをテキストとした研究がボロトフ研究の中心に置かれてきたし、今後もその認識に変わりはないであろう。

『手記』は生前に刊行されることなく、原稿として子供と孫たちの手許に残された。ノートの表紙に『ボロトフの手記、あるいは子孫のために自ら書いたアンドレイ・ボロトフの生涯と出来事』と記されたことから、これが正式なタイトルとなるが、ここでは『手記』とする。ただし、『手記』の全体がどのようなものかについて、正確には解明されていない。以下で、『手記』の成立・刊行史を見ておくことにする。

現在まで判明しているところによれば、ボロトフが『手記』の執筆を開始したのは1789年、エカテリーナ女帝の命により彼女の嫡男 A. Γ. ボプリンスキイの宮殿・ウサーヂバならびに都市を建設すべくボゴロヅツクに暮らしていた時点である(51歳)。その後、彼はその執筆を丹念に続け、1796年に故郷のドヴォリャニノヴォ村へ戻り、その後は規則正しく充実した生活を送っていた1820年代後半まで書き続けたとされる。日記に記したメモをもとに書き直され、清書完成稿とされたのは第39部まで、第40部に入った時点で終了、未完成で未刊のまま後世に残った。各部は多数の書簡で構成され、現在まで確実にテキストとして確定している第29部までの全体で300通を数える。各書簡は「親愛なる友へ」Любезный приятель! という呼びかけで始まり、全体が「読みやすさ」を意識して書かれたことから、『手記』を当時の書簡体の典型とも考えられるが、著者が家族や友人にさまざまな原稿や作品を朗読する習慣を持っていたこと⁽⁸⁾を考慮すれば、「読みやすさ」は未知の読者への「語りかけ」から生まれたという側面も無視できない。

『手記』で記されたのは、18世紀初めのボロトフ家の始まり（一部、そ

(8) ボロトフの息子パーヴェルの日誌(1787年分)が復刻(Козлов, 2006)されて読めるようになり、それによれば、父の朗読は家族の多くの者も参加して、何度も、朝晩あるいは夜遅くにも行われた。

れ以前に遡った個所もある) から 1811 年までである。後述のとおり、39 部のすべてが完全に保存されておらず、完成稿のためのメモ・日記の存在があいまいなことから『手記』の全体が必ずしも明確でないとはいえ、その分量の絶大さと緻密な観察と記述の点で、回想記の双璧として「ロシア回想文化の一時代を画した⁽⁹⁾」と評されるのである。

2. 『手記』の存在確認

1833 年のボロトフ死後、彼の仕事と著作のまとまった紹介は、帝室モスクワ農業協会が発行していた「農業雑誌」(1838 年、第 5 号)に掲載された記事⁽¹⁰⁾がおそらく最初である。そこには、生涯のアウトラインの簡潔な記述(全 12 ページ)、末尾に著作目録が付され、編集者の注に「この短いバイオグラフィは故ボロトフ氏自身の手になるメモによる」とされている。著作目録には著作(刊行)8 点、翻訳(刊行)4 点、そして、「アンドレイ・チモフェエヴィチの死後には、60 点の未刊行原稿が残った」と記され、「その中で最重要なもの」として 22 点のタイトルがあげられている。この 22 点は、その所在も含めて調査・研究が待たれるが、その後、一部は公刊された。われわれが注目すべきは、最後にリストアップされている「22. 私自身の生活の記述、39 部」である。

これが『手記』を指すことは間違いない。『手記』の正式なタイトルとの違いはあるが、おそらく目録では説明的に記したためであろう(すでに、清書原稿が正式タイトルを付して準備済み)。大きな問題は、「39 部」の原稿がそのままの状態で後世に保存されなかったことにある。それが莫大なテキストであるから仕方がないとしても、1833 年のボロトフ死後、大量の著作手稿アーカイヴと蔵書が子供と孫たちへ譲渡され、多くは散逸を免れなかった⁽¹¹⁾。その中で『手記』のテキスト化と研究は多くの障害と

(9) Тартаковский (1991).

(10) 本文中には署名がないが、著者は、息子パーヴェルが付した注によると、編集者の C. A. マスロフ。

困難を抱えたのは当然であり、そのことが『手記』のテクストロジーをめぐる大きな課題として現代まで継承されることとなった。

『手記』の存在はただちに同時代の社会に知られたわけではない。その一例をあげる。当時の有力誌「モスクワ人」(1843年、第3部第5号)に、トゥーラ在住の文芸批評家と思われる H. アンドレエフなる人物が文学評論を掲載している。彼は「ロシア文学史を飾るべき」として同郷の作家ボロトフと B. A. リョーフシンの二人をあげ、ボロトフの簡単な生涯と、雑誌掲載の論文を中心に彼の仕事について紹介する。リョーフシンに比べてボロトフに関しては、作家・文芸批評家としての著作は、当時はまだあまり知られていなかったから⁽¹²⁾、そこで言及されているものも「自由経済協会紀要」や「村の住民」に掲載された地誌・経営・園芸関連の著作である。にもかかわらず、リョーフシンと同列に置いて紹介したのは、トゥーラが生んだ、いわば地方の名士として知らしめたいとの考えによるものだろう。この批評家は、「祖国の息子」(1839年、第4,5号；第8,9冊)に発表されたボロトフの文章「冬宮の引越」に触れる。しかし、内容に関する紹介はなく、続編が期待されると記されているものの、『手記』に関する言及は見られない⁽¹³⁾。

「祖国の息子」誌に掲載された、正しくは「ボロトフ手記からの断片」(サブタイトルに「1762年の冬宮」と題された文章は全体でわずか12ページ、続編の予告はあるが、実現されなかった。そして、何よりも重要な

(11) ボロトフの蔵書に関しては、坂内(2013)注15にあげた文献を参照。

(12) 例えば、Н. И. НОВИКОВ『ロシア作家歴史辞典試案』(1774) (Новиков, 1774) にボロトフの項目がないのは、その刊行の時期からすれば当然である。ただし、その続編と考えられるエヴゲニイ・ミトル「ロシア作家歴史辞典新試案続」(『啓蒙の友』誌, 1805, 第7号に掲載)には14行の記述がある (Евгений, 1805: 60)。

(13) ただし、1838年がボロトフ生誕100年かつ死後5年目にあたっていたことから、それを記念してロシア自由経済協会が主催した集いが同協会ホールで開催され、盛会であったことが記されている (Андреев, 1843: 277)。

問題は、掲載する上で必須である原資料の典拠ならびに全容がまったく記されていないこと、しかも、後に発表された『手記』1762年の該当箇所と照合すると、おそらく編集者によって完全に改編されていることである。先の批評家が『手記』の存在に言及しなかったのは止むを得ないが、1840年代前半の時点で、この批評家だけでなく雑誌編集者・編集部にとって『手記』の全貌はまったく窺うことができず、ましてその重要性和価値を認めることなど考えようもなかった。

3. 刊行への第一歩

事態が動いたのは「祖国雑記」誌（1850年、第69-72巻、1851年、第74-76巻）での『手記』掲載である。これを起点として『手記』刊行の歴史が始まったと考えてよい。これは、ボロトフの孫アレクセイ（1803-1852、パーヴェル（1771-1850）の息子）から入手した清書原稿（全9部とされる）をもとに編纂され、全6部、総計300ページを越える。現時点で我々が入手している『手記』テキストと比較してみると、やはり改編、省略や脱落、校訂ミスが多くあり、正確さに欠けるとされる。『手記』全体から見れば六分の一弱の分量で、第一部から第四部までを第一巻としていることに公刊続行の意図がうかがえるが、後続誌に掲載はない。理由は、アレクセイがロシア国外へ出て、帰国後死去したことにあるとされるが、詳細は不明である⁽¹⁴⁾。

現代からすればテキストロジーの上でいくつもの問題があるとはいえ、当時としては、この「祖国雑記」誌への掲載はボロトフ『手記』への社会的関心を高める上で大きな影響をもたらした。それをもっとも顕著に示すのは、帝室ロシア科学アカデミー会員で優れた人文研究者П. П. ベカルスキイの「18世紀ロシアのメモアル」であろう。「同時代人」（1855年、

(14) 全体で9部あり、残りの第7-9部は「読書文庫」（1858）に掲載された（省略箇所あり）。

第1, 52巻)に掲載されたこの論文では、ピョートル大帝に始まる貴族の教育・言語改革を背景として登場した多くの回想記作者(И. И. ネプリュエフ, Н. Б. ドルゴルカヤ, М. В. ダニロフ, Е. Р. ダシュコヴァ, П. Н. クレクシン, А. А. マトヴェエフ, И. А. ジェリャブシスキイ等)とそのメモアール作品を概観する中で、ボロトフの回想録に注目する。典拠は、上述の、発表されたばかりの「祖国雑記」掲載分である。著者は、ボロトフの生涯をたどりながら、彼の幼少時代の教育・しつけ、彼自身の知的関心と学習状況を『手記』からの引用によって記述する。そして、ボロトフの時代のメモアールの言語と文体の変遷について触れ、同時代のメモアールが最初、スラヴァニズムで書かれ、それが斬新的にガリツィズムへと移行していくが、ボロトフの『手記』はその過程を教えてくれるテキストであるという。また、ボロトフが獲得した言語文化について、「ロシア・ナロードの村に生まれ、クールランドの平民の間に、あるいはケーニヒスベルクの誠実な職人の部屋に暮らしたボロトフが、もはやスラヴァニズムではほとんど書かなかったことは、ロシアでは18世紀末の段階にあっても、文章語が確立しえなかったことを示す」と述べるのである⁽¹⁵⁾。ペカルスキイ論文は、『手記』に関する情報や資料が未だ限られた段階で書かれたもので、具体的な論証には、さらにより多くの根拠が求められるとはいえ、ロシア語(標準語)史・教育史を軸としたロシア言語文化史を構想する際の基本的視点とスタンスを与えた貴重な仕事である。こうした視点からボロトフの『手記』に着目したことの意味は大きく、『手記』の存在と意義を広く知らせる上で重要な役割を果たしたと考えられる。

4. 「完全版」をめざして

次に状況が進展したのは1860年代に入ってからである。1863年に、歴史家で書誌学者のН. С. キセリョフが歴史家のВ. Ф. サマリンの協力を得

(15) Пекарский (1855 : 72-79, 91-102).

て、ボロトフの別の孫ミハイル（1810-1880、上記パーヴェルの息子で先のアレクセイの弟）から入手した原稿をもとに『手記』の刊行を試みるが、検閲により実現しなかったという。その経緯は、キセリョフ自身の文章と孫ミハイルの回想文で知ることができる⁽¹⁶⁾。キセリョフによれば、「相続によって」ミハイルに与えられた原稿を1863年に彼から入手したという。キセリョフにたいして「完全な所有権」とともに同年12月15付で渡された際、「かりに『手記』出版の優先権を親族の誰かが主張することがあれば、その人物にたいして責任ある態度を執る」旨の文書が添えられたとされている。むろん、この文章（1870年11月付）が発表された時点で、以下で述べるセメフスキイによる『手記』出版は実現しており、「後追い」の印象は拭えない。

だが、それ以上に重要な多くの事実を含むのは、ミハイルの発言である。彼によれば、祖父のボロトフは50巻を越える「日々の出来事の下書き帖」を残していたが、その中の39巻を自分はキセリョフとサマリンに売却したのだという。39巻という数字が「手記」全体を示す39と同じであるので紛らわしいが、ミハイルはこの39巻のタイトルをリストアップしており、第39部まで書かれた『手記』とは別物であることが分かる。祖父ボロトフの言う50巻とこの39巻との関係はどのようなものか、引き算をした残りの11巻の所在は現在でも判明していない。

この39巻からなる「下書き」の中身は、残されたタイトル・リストで見ると、きわめて雑多である。いくつかを見ると、「1. アンドレイ・ボロトフの生活 第一部」「2. 1752-1758年のボロトフの出来事（ただし、これは書簡集で1751年分は私（ミハイル）の手許にはまったくない）」「3-9. アンドレイ・ボロトフの生涯と出来事 1758-1769年（第6-12部はあるが、13-16部はなし）」「14. 家の歴史ジャーナル 1766年（簡単な日記）」「私の生活に関する手記続編 1773年」「17. 1790年 日記」「18.

(16) Киселев (1870), Болотов М. П. (1873).

私の生活に関する記述続編 1793-1794 年」「19-21. 簡略日誌 1797-1802」「22-24. “ボゴロヂツク報知”, 1792, 1793 年」「25-26. 過ぎた時間の記念碑, 1796, 1797 年」といった具合にタイトルこそさまざまだが、どれも毎年の出来事を日録風に記録していったものと考えられる。全体として見れば、行方不明の 11 巻も含めて『手記』を完成させる過程で作られた原稿群であり、『手記』の正式タイトルがほぼ輪郭を見せているとはいえ、まだ最終決定にまでは至らぬ段階の原稿ノートの束であったことは間違いない。これらの原稿そのものには価値があるとはいえ、このミハイル＝キセリョフ版を『手記』刊行の底本とすることはそもそも無理だった。

先に、「祖国雑記」誌（1850 年）に『手記』の冒頭部分が掲載され、それがボロトフの孫アレクセイ（パーヴェルの息子）の手許にあった清書原稿をもとにしたものであることを記した。ただし、その続編は「祖国雑記」ではなく、「読書文庫」に発表された（ただし、第 9 部まで）。そのあたりの具体的経緯と、未刊のまま残った清書原稿の行方と全容について詳細は不明だが、結果から見れば、清書原稿は孫アレクセイからその息子で、ボロトフの曾孫にあたるヴラヂーミル（1837-1900）へ相続されたと考えてよい。そして、先の孫ミハイルとキセリョフの『手記』版刊行とはまったく別に、ヴラヂーミルによって本格的な『手記』刊行への道が切り開かれたのである。後述する 20 世紀のボロトフ研究の中核にあった A. П. ベルディシェフによれば、ヴラヂーミルが「1860 年代末にセメフスキイに提案し、『手記』刊行の新たな試みを行った⁽¹⁷⁾」という。1860 年代末とする根拠が示されていないので十分な判断ができないが、キセリョフの思いつきより遅いことにはどのような意味があるのだろうか。ともあれ、1837 年生まれの歴史家 M. И. セメフスキイ⁽¹⁸⁾の手に『手記』清書原稿は渡され、その校訂と編集、そして出版が委ねられることとなったのである。

(17) Бердышев (1988 : 304).

(18) 彼に関しては、坂内 (2013 : 58, 注 57)。

最終的に彼は、発刊された（1870）ばかりの雑誌で、自らその責任編集者となった「ロシアの古事」に『手記』を掲載する選択をしたが、当初は、他の発表方法も模索していた。そのことは、セメフスキ自身⁽¹⁹⁾の文章に明らかである。それによれば、ロシア科学アカデミー準会員で歴史家のO. M. ボヂャンスキは、セメフスキの働きかけに答えて、ボロトフ『手記』についてはすでに知っているの、その原稿3,4部を自分宛てに送るようにとの手紙（1868年10月2日付）を送付した。おそらく、この手紙を受けてセメフスキは曾孫のヴラデーミルに原稿を持参させたと考えられる。だが、それを受けたボヂャンスキの返事には、「それは分量が多すぎる（28巻—書簡著者のカッコ書き、ただし29巻の間違いと考えられるが、不明—引用者）ので、「ロシア歴史・古代協会」の出版物に掲載はできません」（同年11月28日）とある。この出版物は「ロシア史・古代モスクワ協会紀要」を指す。さらにセメフスキは、ロシア歴史協会の学術秘書ボロフツェフにたいしても『手記』発表を働きかけたというが、いずれの目論見も実現しなかった。そこで、『手記』の活字化に全エネルギーを傾注していた彼が選んだ道は、自身が編集者となったばかりの「ロシアの古事」誌への掲載である⁽²⁰⁾。発表は1870年号の同誌（1870-1873年、600部）に、そして全4巻の単行本（1873、600部、さらに1875年に完全版出版の企画があったが、これは第一巻のみ）でも行われた。全体は29部で構成され、見開き片側一枚2ページで総計4700（ページ）を超えるボリュームの本文に加えて、書齋に坐るボロトフ像（息子パーヴェル作）とポートレート、草稿二ページ分の写真コピー、31枚の挿絵（同じくパーヴェル作）と家の見取り図3点が添えられ、第四巻末尾には人名索引（84ページ）も付されている。収録されたのは1816年まで執筆された部分で、そこに記述されたのは18世紀初頭から1795年までの個所であ

(19) Семевский (1879 : 214).

(20) 『手記』の公表のために、この雑誌を自身の資産を使って発刊したとの見解もある（Бердышев, 1988 : 324）。

り、上述したとおり、全 29 部、書簡形式の 300 通で構成されている。この出版ならびに『手記』原稿の所有権にたいしてキシリョフが抗議したことは先に記したとおりである。セメフスキイの反論とキシリョフの再反論があるが、ここで述べる紙幅はない。ただし、後にキシリョフは、ミハイルから購入したボロトフの原稿の中の日記全 4 巻（1793-1794, 1797-1798, 1799-1800, 1801-1802 年部分）を「ロシアの古事」誌編集部へ提供している。雑誌への掲載を依頼したのだろうか。

セメフスキイによる『手記』テキストが全 29 部の構成であることが、ボロトフ自身が記した（むろん、彼の記述が正しいと仮定して）39 部と齟齬をきたしていることは明白である。むろんセメフスキイ自身もそのことは十分理解していた。1871-1873 年版には収録されず、その刊行後に発見された後続部分の活字化は同じくセメフスキイの手で行われ、やはり「ロシアの古事」誌（1889 年第 6 号、1895 年第 8 号）に掲載された。ただし、その内容には不鮮明な部分が見られるのも事実である。というのも、セメフスキイの説明によれば、1870-1873 年版は 34 部の分量があったが、「1886 年に、編集部はさらに第 35, 36, 37 部を入手した」。これは「1799-1802 年に関する個所」（書簡番号では第 349, 350, 351 番、ボロトフの執筆は 1821-1827 年）に該当するというのである。

新たに入手・掲載された部分と既発表部分との整合性については、セメフスキイも頭を悩ませたのだろう。後者が 1795 年までの記述で終わっていて、前者が 1799 年から始まることは、この間の 4 年分が完全にブランクになってしまうからである（そのことはセメフスキイも認めている）。ただし、既発表の部分が第 34 部までの分量としたのは、明らかにセメフスキイのミスか、新発表分が第 35 部から始まることからの「こじつけ」としか考えられない。新掲載の 1799 年の個所を点検すると、文章の形式などの面で第 29 部までの刊行部分とかなりの違いが見られることから⁽²¹⁾,

(21) ごく単純な例として、29 部版では、書簡冒頭が「親愛なる友よ！」

おそらく、今回の典拠となったのはボロトフの最終清書原稿ではなく、それ以前の草稿段階の（例えば、上記キセリョフの所有による）ものと思われる。このように、セメフスキイによる『手記』テキスト探索の努力にもかかわらず、第30-34部ならびに38-39部の行方は現在もなお不明で、おそらくは紛失したと考えられる⁽²²⁾。

セメフスキイによって刊行されたボロトフ『手記』は、分量の点で最大であったことも手伝って、それ以前の断片的紹介とはまったく異なり、『手記』の存在を社会に広く知らしめる上で大きな影響をもたらした。次章で検証するとおり、革命前の歴史学的著作がボロトフ『手記』セメフスキイ版から多くの個所を引用し、『手記』の記述を18世紀ロシアの社会史再構築の重要なテキストと見なして、その根拠を古文書に求める研究まで登場していることが『手記』の重要性を十分に証明してくれるはずである。現代までのボロトフ研究と『手記』研究にあって、セメフスキイ版は、参照する際に留意すべき点があるとはいえ、分量面ならびにテキスト校訂の面で、引用可能なテキストとして価値を残していると考えてよい。

5. 20世紀における刊行

その後の『手記』テキストの出版史を述べておく。1913年にカザンの「若き力」出版社によって「ロシアの古事」誌の試みに倣って繰り返され、第5部までが出版された⁽²³⁾（筆者未見）。

革命後の1930年代に入って、二種類の『手記』が世に出た。いずれもセメフスキイ版を底本としてそこから抜粋したテキストを編集したものである。一つは、「習俗史的メモアル・シリーズ」の一冊として、1930年

Любезный приятель で統一されているのにたいして、後続部では「我が友！」 Мой друг,あるいは Друг мой, さらには、その後に息子の名前「パーヴェル・アンドレエヴィチ」が続く場合が多く見られる。

(22) Тартаковский (1991 : 67)。

(23) Бердышев (1988 : 309)。

に「若き親衛隊」出版社によって刊行された『生涯と出来事』（序文 C. A. ピオントコフスキイ，テキスト校訂・注 H. クラフツォフ，A. モロゾフ）である。これは、全体が 20 章からなり、本文が 536 ページで、分量的にはさほど多くないが、ボロトフの回想を一冊の手軽な形で読める読本（部数 5100 部）としての意味がある。ただし、テキストの選ばれ方には問題が残る。副題の「ペテルブルグでの私の勤務の歴史」がテキスト全体のテーマとなっているかに見えるが、選定基準としてあまり適当とは言えず、内容を誤解する恐れがある。ボロトフの帝都勤務は若い時代のごく短期間に限られているからである。全 20 章は 1761 年に始まり、ほぼ各年別の記述が続き、1795 年が最後である（セメフスキイ版に合致）。テキスト選択の視点が、ボロトフ個人と一家の生活と歴史ではなく、むしろ、同時代の政治的・社会的事件に置かれていることは明白である。例えば、1762 年（第二章）の個所では、宮廷内クーデターに関する個所が収録されたのは事件の重大さから当然としても、章の最後はピョートル三世による治世の終わりに関する記述であり、この年 9 月にボロトフが嬉々として郷里に戻り、新生活を開始した個所は収録されていない。また、1771 年のペスト大流行の個所、1773-1775 年の農民反乱、プガチョフの処刑についての記述は入念に引用されている。序文には、貴族層と経済の緊密な関係性、市場経済への関心であり、H. И. ノヴィコフとの雑誌出版に多くのスペースが割かれている。また、副題を拡大解釈するならば、ペテルブルグとモスクワで起きた出来事・噂の記述、あるいは、短期間のモスクワ生活やモスクワへの旅行、ペテルブルグとの交流として、ボロトフの才能を認める契機となったロシア自由経済協会の書記 A. A. ナルトフとの交信などが両首都とボロトフとのつながりを示していると言えなくもない。しかし、1779 年にモスクワでノヴィコフと面談した（ボロトフによれば、「全人生で最大の記念日」）個所もなく、オリジナル・テキストから巨大なマッスから何を収録するかという問題の大きさを認めたとしても、やはり、全体として『手記』の全容を知る上で物足りなさが残る。

二点目は、1931年に「文学・社会習俗の記念碑」シリーズの一冊として「アカデミア」出版社から全3巻の形で刊行された。セメフスキイ版を底本とし、そこから章数にして約半分弱（省略部分があるものも含む）の分量（3巻総計で1600ページを越える）を収録する。上記「若き親衛隊」版と比べると、やはり『手記』の全容をより明確に示しており、現時点までで手にできる『手記』テキストとしてはセメフスキイ版に次ぐ規模を持つものである。『手記』のテキスト生成、セメフスキイ版との関係については、編集部のコメントとして、「ボロトフ手稿のオリジナル（原稿）との一部照合を行ったが、ボロトフ著作手稿の個々の部分がさまざまな場所にあり、その作業がつねに可能とはならなかったため、完全な照合には至らなかった」と記されている。この点は今後の課題ともなるであろう。問題は、セメフスキイ版からどのような個所を抜粋したのか、という点である。これに関しては、優れた序文の著者C.M. ロンスキイによれば、『手記』の主要な関心はボロトフの生きた農奴制期の社会・習俗的モメント、特に地主・農民生活の習俗の細部にあり、この細部をきわめて正確かつ説得力をこめて記述したことに『手記』の意味があるという。ロンスキイという人物ならびにその仕事の詳細が不明なのは残念だが、序文の内容と文体から見れば、秀逸な歴史研究者であることは間違いない。18-19世紀前半のロシア史像を構築する上で、文学的・習俗的関心が欠かせぬこと、そしてその際に『手記』の意味はきわめて大きいことを、序文は簡潔な中に伝えてくれる⁽²⁴⁾。

期せずして、ほぼ同時期の1930年代初頭にこれら二点の『手記』が刊行されたことはきわめて興味深い。その背景にあるのは、革命前のボロトフへの関心の継承であり、革命前、特に18世紀後半を中心としたロシア

(24) 1931年版にはリプリント版（1973年、ОРР）があり、ここには、シリーズ全体の序文（ルナチャルスキイ）、ロンスキイの序文（Ронский, 1931）に加えて、ラエフの文章（Raef, 1973）と文献書誌（Степанов, 1968）が付けられている。

社会・文化史の再構築の上でボロトフのテキストがきわめて重要であるとの考えである。ただし、二点が刊行されたことのより具体的契機、経緯や意図の詳細は不明であり、今後明らかにされてよい。ただ、一つ考えられるのは、以下で言及するフォルマリスト B. B. シクロフスキイが1929年に発表したボロトフに関する論考が大きな契機となったのではないかと、いう点である。これに関しては次章で述べる。

1930年代初めの『手記』テキストの刊行後、テキスト（リプリントないし改訂版）の刊行は、行われることがなかった。『手記』どころか、ボロトフその人物と仕事そのものについても、「完全な沈黙」でこそなかったものの、多くが語られることはなかった。かろうじて『文学遺産』第9-10（1933）にボロトフの未刊文書が掲載され、「ジャーナリスト・ボロトフ」「文芸批評家・ボロトフ」と題する二編の文章が付されたのが⁽²⁵⁾、第二次世界大戦前の時期としては最後と思われる。

1958年はボロトフ生誕220年、死後125年にあたっていたが、『手記』刊行の動きは見られない。この時期に『手記』研究を地味ながらも執拗に継続していた一人のボロトフ研究者は次のように記した。「ソビエトの読者の中には『手記』の記憶もいまだ残っていたから、新たな『手記』の刊行が期待されたが、「革命後に、縮刷本であれ、一度ならず再版されたボロトフの本は稀観書だった⁽²⁶⁾」。さらに、『手記』をめぐるエピソードを紹介しておく⁽²⁷⁾。1976年9月、若者向けの雑誌「村の若者たち」に、ソ連科学アカデミー会員のД. С. リハチョフにたいする公開書簡が掲載された。それは、リハチョフが人文科学分野の「古典」シリーズ「文学記念碑」の編集メンバーであったことから、『手記』をそのシリーズの中で刊行してほしいという内容だった。また、モスクワで作家たちが「ボロトフ

(25) 『手記』ではないが、例えば、65歳になったことを期して書簡形式で書かれた文章は『手記』の文体の特徴を知る上で貴重である（Морозов, 1933）。

(26) Водовозов (1960 : 41-42)。

(27) Глыга (1980 : 104)。

の夕べ」に集まり（1975、1978年の二回）、そこで『手記』出版の呼びかけが聞かれたという。いずれも実現はしなかった。

『手記』テキストを手にした、との思いが実現したのは1980年代に入ってからである。ボロトフ生誕250年にあたる1988年を目途として、その時期に『手記』テキスト出版が再始動した。『手記』テキスト再刊までには、1930年代初頭から数えて約半世紀の時間が必要であり、一般読者はようやくボロトフの回想記を手にとることができるようになったのである。むしろ、その背景には、1940年代以後の「ソビエト化」の下で、革命前からのボロトフにたいする関心ならびに研究を、水面下であっても継承しようとする、少数ながらも熱烈な人々の「力」と、そしてペレストロイカを目前としたソビエト社会の大きな「うねり」があったことは認めなければならない。1980年代に刊行された『手記』は、具体的には、A. B. グルイガの編纂になる『ボロトフの生涯と出来事』（1986、「同時代人」社、767ページ）、B. H. ガニチェフ編『アンドレイ・チモフェエヴィチ・ボロトフの手記 1737-1796』全2巻（1988、「オカ河岸出版社」（トゥーラ）、526+527ページ）の二点⁽²⁸⁾、そして抄録版（1986）（1988）⁽²⁹⁾も合わせれば四点である。

全一卷で構成された前者「同時代人」社版に収録されたのは、分量的にはセメフスキ版の四分の一、300通の中の三分の一弱に当たる92通（ただし、省略を含む）である。底本としたのは、セメフスキ版ではなく、1931年のアカデミア版である。29部の中で第1、2部の部分（18世紀初頭から1755年までの個所）はほとんどないかわりに、第3、4、5、6部（軍務に就いていた1755-1759年の個所、）が多く、ドヴォリヤニノヴォへ

(28) Болотов (1986) и Болотов (1988).

(29) 1986年版（Рогожин）では全43ページ（書簡第151-152のペスト流行と農民反乱、プガチョフ処刑の個所）、1988年版（Подольский）では、ボロトフについての解説も含めて全43ページ、収録されたのは、序文、書簡二通（第4、第25）である。

帰還する 1762 年の部分はほぼ完全に再録され、それ以後はほんの「つまみ食い」的にいくつかの年の記述が拾われているのが特徴である。グリュイガの手になる序文「彼は我々のために自分について書いた」はエッセー風に書かれた、10 数ページの短文だが、『手記』以外のボロトフの仕事への目配りも忘れず、これまでの研究史を十分咀嚼して書かれた力作である。

一方、ボロトフの郷土たるトゥーラで出版された全二巻本は、タイトルも『手記』とされている。全二巻となっているものの、底本としたセメフスキイ版の 300 通の約四分の一の 79 通（省略を含む）で、先の「同時代人」社のものと比べても分量的に多くない。そのかわりに、第二巻の末尾に『過ぎた時代の備忘録、あるいはかつての事件ならびに民衆の間で広まった噂に関する歴史的手記 1796』⁽³⁰⁾が収録されている。収録部分が、郷里に戻った 1762 年を中心として、ボゴロゼツクでの生活が佳境となる 1783-1788 年頃の個所となっているのは、やはりトゥーラ県の歴史との関わりを強調するためであろうか。

1990 年代になり、まとまった『手記』テキストとしてセメフスキイ版を底本とした三巻本が刊行された（1993、「テラ」社、25000 部）⁽³¹⁾。ただし、1931 年版のリプリントであり、編集・内容とも新味はない。もう一点、一風変わった版が 1990 年にカリニングラードで出版された。出版地がその内容をすでに暗示しているとおり、ケーニヒスベルグ（現在名はカリニングラード）は若きボロトフが 1758 年から 4 年近くを過ごした町だが、この土地ならびにそこでの体験を語った箇所、具体的には、セメフスキイ版を底本として、その第 5, 6, 7, 8 部から関連部分をまとめたものである。題して『ケーニヒスベルグの A. T. ボロトフ』（191 ページ）⁽³²⁾、

(30) ボロトフ生前には未刊、1875 年に件のキセリョフによって単行本として出版された。最近の刊行として、2004 年にリプリント版がある（カリニングラード、205 ページ、3000 部）。

(31) Болотов (1993)。

(32) Кенигсберг (1990)。

分量が少ないとはいえ、ソ連崩壊直前の「地方」史への大きな関心の成果である。

このように、ボロトフ『手記』刊行の歴史は、その分量の圧倒的な多さに始まって、著者死後に残された清書原稿の一部行方不明と所在確認、そして、清書完成稿以前の草稿・日記・メモ書きとの関連の解明等々、幾多の課題を抱えてきた。この点での今後の調査・研究を期待できる可能性は皆無ではないとはいえ、それらはいずれも大きな難問であることに間違いはない。セメフスキイ版のテキストを出発点としながらも⁽³³⁾、より精度の高い『手記』テキストを強く待望するのは本稿著者だけではないだろう。そして、このことは次章の『手記』研究とも深く関連するが、19世紀半ばに始まった『手記』テキスト校訂・刊行が、それぞれの時代とテキストに直面した研究者の問題関心・設定と密接に関わっていたことは当然である。

Ⅲ. テキスト『手記』にたいして、いかなるアプローチがとられてきたか

1. 18世紀地方貴族の歴史資料

『手記』のテキスト刊行がいくらか錯綜した過程を示したにもかかわらず、『手記』の重要性の認識は早くから生まれていた。ペカルスキイ論文

(33) セメフスキイ版は、現在まで刊行されてきた『手記』の中では分量的に最大であり、引用する際の信頼度も高い「もっとも完全な版」とされてきた（いる）が、現代の歴史家で優れたアーカイヴィストであるタルタコフスキイによれば、オリジナル原稿と比較して「必ずしも欠陥がないものではなく」、検閲を考慮した省略があり、テキストロジ一面での精査が必要という（Тартаковский, 1991: 67）。本文中では触れなかったが、『手記』のドイツ語訳が刊行されている（Bolotow, 1990. 全二巻 468+503 ページ）。セメフスキイ版を底本とするが、章構成その他の面で、ボロトフの生涯と仕事をより明確にイメージできるための努力の大きさが見える。

が発表された 1850 年代、『手記』の全容が未だ不明の時期から、『手記』が人文研究の無限の可能性を有するテキストであることの漠とした予感が生まれていたと言って過言ではない。

セメフスキイによる「完全版」刊行（1870-1873）は、その予感を現実とする決定的な契機となった。このセメフスキイ版『手記』を基本資料として選択し、それを「縦横に」読み込み、社会経済史、地方史、さらには習俗史といった幅広い領域にまたがる研究成果を公表したのは E. H. シシェプキナである⁽³⁴⁾。彼女の「18 世紀の流文学」(1886) は、タイトルそのものから予想される文学史ではなく、むしろ、18 世紀半ば以降のロシア社会の中で、翻訳物も含めた啓蒙的著作が果たした役割について素描した論考である。そこでは、出典のページが示されることはないが、資料はすべて『手記』セメフスキイ版から取られている。また、「カシーラの貴族」(1889) は、モスクワ・ルーシ期には国の南端に位置し、現在はトゥーラ、カルーガ県の北部に位置するカシーラ地方（18 世紀以降は郡）の 15 世紀以降の歴史、特に 16-17 世紀にこの土地で活躍した貴族の動静を古文書も含めた多数の文献で叙述した、いわば地方史の仕事である。カシーラはボロトフ家の祖先のルーツの土地であることから『手記』からの引用があるのは当然だが、ボロトフ家の歴史に多くのスペースが割かれていることは、研究者の関心の在り処がボロトフに傾斜していることを示す。そして、シシェプキナによる単行本として刊行されたのが『勤務と家にお

(34) 『ブロックハウス・エフロン百科事典』第 79 卷（1890）によれば、彼女は 1854 年生まれ、モスクワのゲリエ教授女子大学に入学、K. H. ベストゥージェフ＝リュミンに学んだ後、ペテルブルグの女子大学その他、各教育機関でロシア史を講じた歴史家（ただし、事典の記載の冒頭に「女性作家」とある）である。彼女に関しては、代表作とも呼ぶべき『昔の地主』にたいする評価とともにさらに調査が必要である。ボロトフに関する豊富な知識と多くの情報を持っていたためと思われるが、著名な書誌として知られるヴェンゲロフ編『ロシアの作家と研究者の批評・バイオグラフィ事典』のボロトフの項目をヴェンゲロフとともに記している（Щепкина, 1897）。

ける昔の地主 家族のクロニクルから 1578-1762』(1890)であり、ここには、上述の二編が収録(タイトルに変更あり)された他、「改革期の世代」「18世紀の教育」「18世紀半ばの村の生活と生業」「軍務」「アブラクシンの行軍」「グロス・エゲルスドルフの戦闘」「ケーニヒスベルグで」と題された章で構成されている。章立てそのものからは必ずしも明確でないが、内容はボロトフの『手記』を主要な典拠とした、18世紀ロシア地方貴族史研究である。しかも、ボロトフ家そのものの歴史に特化することのない、18世紀ロシア社会・文化史を指向したものとして注目できる。

このシシェプキナの仕事に代表されるボロトフへの着目は、同時代の多くの歴史家の研究成果にも鮮明に見出すことができる。例えば、歴史家 П. Н. ミリュコフの大著『ロシア文化史概観』では、18世紀半ばに地方の貴族社会がピョートル改革期の文化を徐々に借用していく様子、やはり18世紀半ばに小説が害毒あるものとされながらも好んで読まれ、どのような作品が受け入れられ、読書文化が生まれていったのか、首都と地方の文化格差も含めたその具体的記述が『手記』から多く引用されている⁽³⁵⁾。その他に、Н. Чечулин『18世紀後半ロシアの地方社会』(1889)⁽³⁶⁾、С. М. ソロヴィヨフ『ロシア史』、Н. И. コストマロフ、В. О. クリュチェフスキイ、В. И. セメフスキイ(論文「エカテリーナ二世期の国有地農民」)⁽³⁷⁾、С. П. メリグノフ等々の仕事がある。また、革命前に刊行され、

(35) ミリュコフのボロトフへの関心は、「重農主義者」ボロトフとして、『文化史』以前からあったと思われる。『ブロックハウス・エフロン百科事典』の「ロシアの重農主義者」の項目の執筆者はミリュコフである。

(36) 著者Чечулинが「小地主——それが大多数だったが——は、主として、いわば巢として暮らしていた」として、この巢を『手記』からの引用とするのを見ると、有名なツルゲーネフの『貴族の巢』を別とすれば、貴族のウサーヂバを早くから「巢」と呼び慣わしていた証拠と読める(Чечулин, 1889 : 29)。

(37) 『手記』編纂・出版者の兄で、主著『エカテリーナ二世治世下の農民』(全二巻, 1882-1902)で知られる。彼に関しては、土肥(2010, 初出は

18 世紀習俗史研究の集約と呼べる優れた資料集『同時代人の回想におけるロシア習俗 18 世紀』（1911-？ 第一巻二部構成？）でも、『手記』から引用された記事がきわめて多数見られる（「首都と地方」「地方行政改革」「農民と民衆争乱」「モスクワにおけるプガチョフ反乱の反響」の項⁽³⁸⁾）。

2. 1920-1930 年代のボロトフ像

このように、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのロシア史研究の中で『手記』が不可欠の資料として大きな役割を与えられていたのにたいして、その後、ボロトフならびに彼の著作に関する関心は急速に弱まっていく。1920 年代には、農業経済研究の創始者としてのボロトフという言葉がいくつも見られるが⁽³⁹⁾、それも時間の問題だった。先に触れた 1930 年代の、おそらくは第二次世界大戦前で最後と思われるボロトフの未刊文書掲載の際にも、「ブルジョア＝地主歴史学」を意識した序文が書かれなくてはならなかった。ボロトフ「無視」の動きがひたひたと迫っていた。それは、ソビエト・イデオロギーの宣伝と流布・浸透によるものである、と一応は理解できるかもしれない。ボロトフは中小規模とはいえ貴族地主として、

1990) が詳しい。ただし、この主著で『手記』が参照されなかった理由は不明である。

(38) Русский быт (2012)。ただし、この復刻版の優れたアンソロジーに関する書誌情報はあまり多くない。むしろ、出版社「ザドルガ」(1911-1923) の設立と、編纂者メリグノフ夫妻の革命後の運命に多くの関心が向けられている。

(39) 革命後の仕事として、B. B. スヴァトロフスキイ『ロシア経済思想史』（1923）第 6 章「ロシアにおける農業資本主義の萌芽」には「農業経済学の分野でロシア最初の独創的な研究者」としてのボロトフ記述がある。ドイツ農政学の創始者の一人であるテーアらの仕事との関わりがごく簡単に述べられ、『手記』にも触れられている。さらに、A. B. チャヤノフ論文「二世紀の間のロシア農業思想発展の主流」にも言及がある。

農民暴動・プガチョフ反乱やフランス革命にたいする、極端ではないとしても保守的な政治的見解のイデオロギーを暗黙に批判する傾向が生まれたのであろう。『手記』は、革命が断罪した農奴制と貴族文化を、正確に、ないしは「純粹に」「好奇心に従って」記述したとしても、最終的には肯定する意図を含んだテキストではなかったのか。

こうした潮流にたいして、ある意味で「掉さす」仕事もたらされた。それは、狭義のボロトフ研究という枠に収まるものではなかったが、消えゆくかもしれないボロトフと彼の『手記』を記憶に残す、あるいはそれへのオマージュとして重要と考えられる。それがB.B.シクロフスキイ「貴族ボロトフに関する簡潔で、信頼できる物語（彼の手記にもとづいて編集された）」（雑誌『赤い処女地』1928年、第12巻）である。ここでは、いかにもシクロフスキイらしい、そして「反時代的な」ボロトフ像が提示される。まず、全体は「序文」（しかもそのロシア語はボロトフのそれと同じく、いささか古めかしい *предуведомление*（文字通りの意味は「予めのお知らせ」）か）が使用される）に始まり、セメフスキイ版と同じく29章で構成される。各章は「貴族ボロトフの起源について」「父親の死と吠える犬について」「村での暮らし、母の罵りとピーテルへの出立」といった具合に、『手記』の展開をそのまま受け、ただしごくごく簡略化した形で叙述した物語として再構成されている。『手記』の原テキストとの詳細な比較対照、さらに、この仕事それ自体の意図とその意味は今後の大きな研究課題となるはずである。ここでシクロフスキイが『手記』の筋展開のみならず、言葉と文体を反復・模倣しつつ構築し直したこと、いわば「脱構築」したことの意義はきわめて大きい。時に、言葉遊び・ユーモアや皮肉を込めながら、『手記』にたいする一種のパロディ作品を著者は目ざしたのであろう⁽⁴⁰⁾。そしてこの試みは成功し、一定程度の理解を得たとの

(40) 後述するパフチナの最新の研究を参照。1920-1930年代初頭のシクロフスキイの著作の中で、18世紀文学に関する『マトヴェイ・コマロフ』（1929）、『チュルコフとリョーフシン』（1933）は「異色な」仕事と見える

評価がある。というのも、優れた「ロシア文学史＝形成史」研究として『文学と商業』（1929）のような仕事⁽⁴¹⁾がほぼ同時期に発表され、シクロフスキイの「物語」掲載が契機となって、上記のとおり、1930年代初頭に二種類の『手記』テキストが刊行されたと考えられているからである。二つの『手記』序文にはシクロフスキイの名も、「物語」への言及もないが、明らかに両序文の中には、経済活動の中に置かれた文学の在り方、18世紀半ば以降の「制度」としてのロシア文学・文化の形成と変容の過程にたいする強い関心が認められる。かくて、この時点でそれまでのボロトフ像は大きく転換することになる。革命前のボロトフ観が、ある意味きわめて「古典的」で、彼の人間としての善良さ、真実や国にたいする誠実さに基礎を置き、それが『手記』の読解を動かす契機となっていたのにたいして、革命後は、ボロトフは地主＝農奴主義者として、時代に先んずることのない、取り残された過去の人物とされつつあった。しかし、ごく少数ながらも、1920年代後半からボロトフに改めて注目したシクロフスキイに代表される人々は、『手記』の荒筋やその内容、まして作者のイデオロギーよりも、むしろ言葉と文体そのものに込められた感性と思想にこそ「同時代人ボロトフ」としての意味があると主張したのである。

かもしれない。しかし、この二作ならびにボロトフ「再話」は、1930年代に入って支配的となるロシア文学研究、特に18世紀文学研究（その後、グロフスキイらにより急速に公式化されていく）にたいする挑戦ではなかったのか。彼にとって「破壊すべき規範」（佐藤，2006）とは、革命前の実証主義的ボロトフ研究でありであり、そこで定着していくものと想定できるボロトフ表象の定型化であったかもしれない。Гаспаров（2006）を参照。シクロフスキイのボロトフ「物語」は1930年に単行本として刊行されたというが、未見。この「物語」にたいする、ボロトフ研究者ベルディシェフの憤激（Бердышев, 1988 : 9）はすさまじい。

(41) Гриц（1929）。ボロトフからの引用が多数見られる。本書の序文はシクロフスキイである。

3. ボロトフ研究、苦難の継承、その頃アメリカで

シクロフスキイらの試みにもかかわらず、ボロトフへの関心は1930年代後半以後、衰退する一方であり、第二次世界大戦の開始以後、その関心は完全に消滅したとさえ言ってよい。18-19世紀前半に実に多くの仕事を残したが、中央のロシアとはほとんど関係を持たず、自分の小村に引き籠った「趣味人」に注目する余裕など当時の社会にはなかったのは、ある意味で当然かもしれない。『大ソビエト百科事典』のボロトフの項目は消去されはしなかったものの、版を重ねるごとに（第一版1927、第二版1950、第三版1970）記述が減っていった。かろうじてボロトフの自然科学分野での仕事、具体的には農学・生物学・園芸学等に関する著作・活動に関して、いくつかの言及がある（次に述べるベルディシェフの仕事他）とはいえ、18世紀ロシア文学史・社会思想史・文化史研究で『手記』が言及されることはほとんどなくなっていった。そこには、革命前のロシア史研究の重点が農民史、「革命前史」としての民衆反乱史（運動・組織・思想を含めた）や革命思想史に傾斜し、貴族史・貴族文化研究、さらに、貴族屋敷（ウサーヂバ）を舞台に展開した18-20世紀初頭のロシア文化・芸術への「まなざし」を抑制していこうとする精神的底流がうかがえるのである。

もちろん、つねに例外はあった。直接的にボロトフ研究を目指したのではないが、ボロトフの存在を忘れることのなかった二人の名字が浮かぶ。一人は民俗学者 M. K. アザドフスキイである。さすがにロシア革命前の「文学」伝統の全体に精通していた彼は、その最後の著作とも言うべき『ロシア民俗学史』（第一巻、1958）⁽⁴²⁾で、本来であれば狭義の民俗学の枠では

(42) Азадовский (1958). 彼の『民俗学史』（全二巻）は、狭く口承文学に限定されることなく、口承文学と記述文学の相関性、そして双方の文学を生むコトバと「思想」に深く切り込んだ傑作である。その方法は、いささか古典的であるとはいえ、ロシア精神文化史・ロシア民族学＝民俗学史を叙述した A. H. Пипин の学問的伝統を継承したものであり、既成ディシプ

決して触れられるはずのないボロトフに言及する。貴族ボロトフの農奴制支持、フランス革命への否定的考え方、そしてナロード観については「公式的」立場を取りながらも、18-19世紀の貴族インテリゲンツィヤの民衆文化にたいするスタンスの「二重性」を指摘するのである。それは、革命後に広まった図式的イデオロギーによる安易な理解と研究態度（「通俗社会学主義」）にたいする批判を込めたものだった。二人目は、ロシア庭園・パーク史研究者である E. П. シシュキナである。1952年に審査、合格した彼女の博士論文『18世紀末ポドモスコヴィエのウサーヂバ庭園とパーク』（ただし、刊行は半世紀以上の後の2007年）⁽⁴³⁾は、対象となる時期のウサーヂバ庭園・パークの全体像を、理論、具体的諸タイプ、構成要素の一般的特徴といった三つの側面から分析・記述した、きわめて壮大な枠組みを備えた完成度の高い仕事であり、建築を含む庭園を、文献による歴史研究と現代のフィールドワークとを重ねながら、それが生まれた時代の幅広い芸術・思想文化全体の中で捉えようとした秀逸な研究成果である。ボロトフに関しては、第一部第一章で「庭園理論家」の言説紹介の際に Г. Р. デルジャヴィン、カラムジン、Н. А. リヴォフ、Н. П. オシポフ、П. С. パラスの理論とともに叙述される。ボロトフが刊行した雑誌「経営雑誌」「村の住民」に掲載された彼のすべての文章を検証し、『手記』（1931年版）の参照も忘れている。

こうした二人の研究者の仕事は、民俗学と庭園学という分野こそ違い、しかもボロトフ研究を正面からテーマとしたのではなかったものの、ボロトフの名前を後世に残した点で大きな存在として記憶されてよい。

1950-1960年代に「声低く」語ったこうした少数の研究者の存在⁽⁴⁴⁾に

リンの追認を旨とする研究史＝学説史とはまったく異なる成果である。

(43) Щукина (2007)。

(44) 注26で触れたヴォドヴォゾフの論文（Водовозов, 1960）は、『手記』テクストロジーにも目配りを忘れず、ボロトフの全体像を丁寧に素述した堅実な仕事である。

加えて、ボロトフを正面から研究対象とする人物が登場した。農業史研究者の A. II. ベルドイシエフである。彼こそが、第二次世界大戦後から 1980 年代までのボロトフ研究を、文字通り孤軍奮闘の形で支えた人物として間違いない。ベルドイシエフが記すところによれば⁽⁴⁵⁾、1946 年に初めてボロトフの名前に出会ったという。この年、モスクワの農業大学大学院に入学した彼は、そこで「自由経済協会」（1765 年に設立）に関心を持ち、この協会の「紀要」分析をテーマに研究を開始した。「自由経済協会」は 1766 年にボロトフがその活動を知り、そのアンケートに答える形で彼自身の村の領地・ウサーヂバのディテールを詳細に観察する。その成果は協会に送付され、「紀要」に掲載されたのがボロトフの処女作となったことを思い起こすならば、ボロトフの出発点にベルドイシエフも立ったことになる。彼の初期の著作は『A. T. ボロトフ —— ロシア最初の農学者』（1949）、続いて、II. M. ポリャコフとの共著『A. T. ボロトフと農業・生物学分野の仕事』（1952、同人との共編になる『ボロトフ著作集』（1952）もある）、農業博士号取得論文は「自由経済協会と、ロシアにおける農業の学問的基礎の発展におけるその役割」（1969 年合格）であり、いずれも農業・生物学関連の仕事である。その後のボロトフ関連の著作を挙げるならば、『アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフ（1738-1833） 農学活動家ビブリオグラフィへの資料』（1984）は II. B. ボロフスキフ編になるボロトフの著作（死後、1952 年までに刊行された 936 点）、ボロトフに関する文献 87 点（1983 年まで）を含む目録であり、その序文がベルドイシエフによる。ボロトフ生誕 250 年の 1988 年には、ボロトフに関する彼の二冊の著書が同時に刊行された。『アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフ —— 学問と文化の傑出した活動家』『アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフ ロシア農学の創始者』がそれであり、いずれも 40 年以上にもわたるボロトフ研究の大きな成果として、現在ならびに今後のボロトフ研究に

(45) Болотов (2001).

とって欠かせない古典である。前者は「ナウカ」社出版によるシリーズ「学問・バイオグラフィ文献」の一冊として刊行されたもので、誕生から子供時代、軍務時代、ドヴォリャニノヴォでの生活開始、エカテリーナ女帝の命による管理者勤務期、学問のプロパガンディスト、果実学の仕事期、再度のドヴォリャニノヴォ期、学問的遺産と子孫の記憶、といった伝記形式で書かれている。彼の専門性から見れば、本稿テーマである『手記』に関する直接の仕事はない。ただし、ボロトフに関する社会的記憶を消滅させないために彼は全精力を傾けた⁽⁴⁶⁾。ボロトフの著作（公刊、未公刊とも）の刊行・アンソロジー編纂、文献調査、自身のボロトフ研究成果の公刊、さらにはミュージアム開館への各方面への執拗な働きかけといった彼の仕事故に、ボロトフの名前が確実に継承されたことを否定することは不可能である。ボロトフの郷里ドヴォリャニノヴォ村にあった彼の屋敷（ウサーヂバ）は、1904-1921年にスパソ＝カザン女子僧院として使用された後、ネップ期の1922年に破壊されたが、ベルディシェフの気の遠くなるような尽力によって、1988年にボロトフ・ミュージアム＝ウサーヂバが創設され、今なお活動を続けている。

1980年代のソ連におけるボロトフ、特に『手記』をめぐる新たな研究の展開を述べる前に、ベルディシェフらを例外として、1960-1970年代のソビエトにおけるボロトフ研究の「沈黙」とは好対照を見せる動きがアメリカで起きていたことに触れなくてはならない。具体的に言えば、J.L. ライスとM. ラエフといった、アメリカにおいて、革命前ロシア思想・文化・文学研究を主導する立場にいた研究者がボロトフと『手記』に着目していたのである。ラエフは、彼の名著『ロシア・インテリゲンツィヤの起

(46) 本稿筆者の考えとは異なり、1960年代からボロトフ「復興」の動きが始まるとしたベルディシェフによれば、1961年から1980年までに15点のボロトフ関連文章が発表されたという。点数の多寡は別として、ボロトフ復興に一生を捧げた人物の指摘として頭が下がる。ドヴォリャニノヴォ村に隣接するルシャチノ村にある彼の墓はボロトフの傍らに建てられている。

源 18 世紀』(1966)で『手記』から多数の記述を引用し、1931 年版『手記』のリプリント版に、5 ページと短いながら紹介としては高質な序文を寄せている。また、ライスはボロトフ研究の成果として二本の論文「ボロトフ文書とアンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフ 彼その人」(1976), 「A. T. ボロトフの記憶とロシア文学史」(1976)を発表している⁽⁴⁷⁾。いずれも論文に終わり、単行本としてまとめられなかったのは残念だが、レベルはきわめて高く、アメリカのロシア文化研究の奥行きと深遠さを明確に物語るものである。これら先駆的な論考が示しているボロトフへの関心がアメリカのその後のロシア文化(史)研究にもたらした影響がきわめて大きいのは当然である。その最大の成果は、T. ニューリン『庭園の声 アンドレイ・ボロトフとロシア田園の不安 1738-1833』(2001)⁽⁴⁸⁾であろう。『手記』から多数の記述が引用されるのは当然だが、ここには、ボロトフの莫大なアーカイヴならびに文献の調査を通じて切り開かれた、新たなボロトフ研究の可能性が確実にうかがえる。内容の紹介は紙幅が足りないの
で断念する。

4. 1980 年代以後、21 世紀の現況

1980 年代以降の時期に入る。『手記』テキストの(再々)刊行については前章で述べたが、『手記』ならびにボロトフ研究の幕開けは、やはり 1988 年がボロトフ生誕 250 年という大きな節目となったこと、そして 1980 年代半ば以降のベレストロイカ開始と、そのもとで「自由な雰囲気」が生まれたことに起因する。その先頭を切ったのは、ボロトフの郷里トゥーラの作家、郷土史家や文芸批評家・ジャーナリストたちである⁽⁴⁹⁾。ト

(47) Raef (1966 ; 1973), Rice (1967a ; 1967b)。

(48) Newlin (2001)。ロシアも含めたウサーヂバ文化研究の「快挙」と呼ぶべき P. ルーズベルトの仕事 (Roosevelt, 1995) でもボロトフ『手記』は重要な一次資料である。庭園や屋敷屋内の様子が描かれる際に引用は欠かせない。

ウーラの作家・詩人で、優れた地方文化誌『トゥーラの歴史』（1977）の著者としても知られる В. Я. ラザレフはボロトフを主人公とした中編小説『秘められた生』（1978）を、また、ボロトフ「復権」の呼びかけの一人であった作家 С. М. ノヴィコフは「歴史ドキュメント小説」と題して『ボロトフ』（1983）を発表し、これは刊行の翌年に制作されたドキュメント・フィルムの台本となった（監督 Ю. ザクレフススキイ、ただし筆者未見）⁽⁵⁰⁾。さらに、ボロトフが長らくその建設計画と施工に関わったボブリンスキイのウサーズバ＝宮殿ボゴロヂツクの歴史を扱った庭園史研究上の名著『ボゴロヂツクにパークあり』（1984）の著者 О. Н. リュプチェンコは伝記として『ボロトフ』（1988）を、В. Н. ガニチュフは『トゥーラの百科全書家』（1986）を刊行した。ともに啓蒙的なボロトフ伝であるこの二点は、参考文献リストや注釈が乏しいのが難点とはいえ、独自の調査によって明らかになった事実の紹介もあり⁽⁵¹⁾、貴重である。上で紹介した一巻本『手記』（1986）の編者 А. В. グルィガは、スラヴ派的ロシア文化論である『歴史の芸術』（1980）の「ボロトフとわれら」と題する節の冒頭に「ボロトフこそ、18世紀ロシアを体現する像である」と書き、ボロトフの「同時代性」について述べた。先にあげたボロトフ研究者のベルドイシェフは二冊のボロトフ「伝」「研究」を刊行（ともに1988）するが、『手記』研究の点でのオリジナリティはほとんど見られないため、ここでは触れない。また、郷土の自然保護活動家の著作として、Ю. В. ベスパロ

(49) Лазарев (1977 ; 1978), Новиков (1983), Любченко (1984 ; 1988), Ганичев (1986), Гулыга (1980), Беспаров (1988), Приходько (1988). ノヴィコフは文集『種播く者と保護者』で100ページに及ぶボロトフ特集を組んでいる（Новиков, 1992）。

(50) ボロトフの生涯を映像化する動き（タイトル「18世紀からの手紙」）は2000年にもあったが、実現しなかった。

(51) 例えば、後者には、ボロトフ父子の間で交わされた1789年の多数書簡（これまで未刊）や現存しない旧墓碑銘（復刻文）が読める。

フ『アンドレイ・チモフェエヴィチ・ボロトフ——自然の実験者』(1988), B. E. プリホヂコ『ボロトフ——18世紀の優れた自然科学者』(1988)も世に出た。いずれも自然科学研究者としてのボロトフを前面に出した仕事ではあるが、ボロトフ「復活」に力となったのは言うまでもない。そして、このような動きが、現代のトゥーラ地方の「郷土の偉人」としてのボロトフ像の創成につながっていったことは間違いない。

さらにこの時期に、ボロトフを人文研究の中で明確かつ正当に評価し、位置づけることになったのは、ロシア文学研究所（プーシキン館）が刊行する『18世紀ロシア作家事典』第一冊に掲載されたボロトフの項（著者はP. M. ラザルチュク）である⁽⁵²⁾。ここには、ボロトフのバイオグラフィの正確な叙述を軸として、自然科学を含めた多分野に及ぶ彼の仕事の全容、特に人文部門（演劇、宗教道德等を含む）に関する彼の著作と活動がほぼもらすことなく、簡略にはあるが、記され（全4ページ二段組み）、最後に、もっとも重要な著作として『手記』が言及されている。全体として、未刊行文献にたいする配慮もあって、ボロトフが18-19世紀（そして現代にまで及ぶ）ロシア文化史研究の重要なターゲットであることを改めて確認する「宣言」として考えられる。同事典が1988年に刊行されたことは暗示的ではないだろうか。これまで何度も触れたとおり、1988年がボロトフ誕生250年という大きな記念年にあたることから、トゥーラをはじめ多くの場所と機関で、祝賀の集まりが開催された。その詳細はベルディシェフの記事に譲るが、モスクワのソ連科学アカデミー付属世界文学研究所でのコンフェレンス（同年10月19日開催）では、上述したガニチュエフ、ラザレフの他、E. M. センチェンコヴァ、B. A. スタロスチン、Г. Г. エリザヴェチナ、A. Л. トルマチョフ、C. A. ポリシシユクらの発表が行われた⁽⁵³⁾。人文研究の分野でボロトフをテーマとしたコンフェレンス

(52) Лазарчук (1988). それ以前に（革命前も含む）刊行された「ロシア文学（史）事典」におけるボロトフの記述との比較が具体的作業課題として必要である。

としては、おそらく最初であろう⁽⁵⁴⁾。

ロシア中世文学・ロシア文化史研究の重鎮 Д. С. リハチョフによるロシア庭園文化史論である『庭園の詩学』（原題『庭園のポエジー 庭園・パークのスタイルの意味論に向けて』、初版 1982）⁽⁵⁵⁾も、1980 年代にボロトフへの関心を高める上で大きな力となった。そこには、『手記』からの直接の引用こそないものの（言及はある）、ボロトフが発行した「経営雑誌」に掲載した多くの文章をていねいに読み解き、フランス式整形庭園から風景庭園への転換期におけるロシア文化とその感性ならびに思想を論じようとした。そして、リハチョフが目ざした庭園文化論は、革命前からのロシア庭園史・ウサーヂバ研究の「復権」である。と同時に、それは新たな方法論的目論見を持っていた。彼は、ロシア文化と西欧文化の「衝突と融合」を背景として、18 世紀後半から末、そして 19 世紀半ばにかけてロシア庭園が「成立」していったこと、そしてこの成立と変遷の過程は、文学を傍らに置いた庭園というテキストの意味論的分析によって解明できると考えたからである。したがって、リハチョフの著作は、ボロトフと庭園・ウサーヂバとの関係性に関するその後の研究に確実に大きなインパクトを与えた。そうした仕事として、近年の成果は、В. Н. トゥルボフ「А. Т. Боро́тов著作における 18 世紀最後の三半世紀ロシア・ウサーヂバの理想モデル」（2000）、А. Ю. ヴェセロヴァ「Боро́товの美学 文学批評と庭園・パーク芸術」（2000）、И. В. シシェブリギナ（2003）、Е. Е. プリказチコヴァ（2009）、Н. А. フィリポヴァ「А. Т. Боро́тов——ロシア・ウサーヂバ庭園の創設者」（2011）等⁽⁵⁶⁾があげられる。

(53) Бердышев (2001 : 36-38)。

(54) 1978 年にボロトフ生誕 240 年の集まりが行われたが、詳細は不明。

(55) Лихачев (1982)。彼が、先に述べたシシュキナによる庭園・パーク研究を参照できなかったのは、未刊行であったことから仕方がないが、残念である。

(56) Тулу́пов (2000), Веселова (2000), Щеблыгина (2003), Приказчикова

さらに、庭園とも深く関わる美学・宗教道徳・倫理分野におけるボロトフの著作（未刊も含む）を対象とした仕事が、特に最近、数多く生まれているのも大きな特徴である。上述した研究者の中でもシシェブリギナの論考⁽⁵⁷⁾は、『手記』の背景に存在するボロトフの精神世界へアプローチしようとする仕事として貴重である。また、道徳とのつながりで教育関連の分野でも、ボロトフの『手記』の価値と利用度はますます高まっている感がある。教育史研究において原資料がきわめて乏しい18世紀の「具体」と「現場」を証言しているためである。O. E. コシエレヴァ『中世ロシアと啓蒙期ロシアの“自分の子ども時代”』（2000）⁽⁵⁸⁾は16-18世紀の教育の実体を示す資料のアンソロジーとして貴重だが、そこには、『手記』から多数の記述が抄録ではあるが、引用されている（全体で60ページ、序文ならびに書簡第4-12）。また、この分野の研究として、A. Л. メニシコヴァ「18世紀ロシアにおける農民の子どものしつけに関するメモアール」（2006）があり、M. シシェプキン、H. スミルノフ、セルゲイ・アクサーコフらの回想とともにボロトフの多くの記述が援用されている⁽⁵⁹⁾。

この教育史も含めた幅広いロシア史研究全体の中にあって、ウサーヂバ（貴族屋敷）研究は、革命前の貴族とその文化にたいするある種のタブーもあって、ソビエト期には、ごく一部の美術、建築、そして庭園の個別研究を除き、完全に停止していたが、1991年12月に「ロシア・ウサーヂバ研究会」（1922年にB. B. ズグラによって創立、1930年に解散）が活動を再開し、この会の活動が中核となってウサーヂバ研究は大きく展開した。Л. В. イヴァノヴァ（ロシア科学アカデミー付属ロシア史研究所の上級研究員、専門はソビエト期の歴史学研究史）の主導の下、ロシア史研究所が総力を挙げて刊行した『16-20世紀ロシアの貴族ならびに商人のウサーヂ

（2009）、Филиппова（2011）。

（57）Щеблыгина（1996；1999）。

（58）Кошелева（2000）。

（59）Меньшикова（2006）。

バ』(2001)⁽⁶⁰⁾は、ウサーヂバを研究対象として復権させ、歴史学研究の中にウサーヂバ文化研究を明確に位置付けた記念碑の仕事である。そして、ここにはボロトフ『手記』から、18世紀後半の貴族ウサーヂバ生活の諸相をもっとも具体的に知らせる資料として多数の引用が見られるのである⁽⁶¹⁾。

『手記』テキストにたいする言語学的研究は、まったく新たなアプローチではない。先に触れたとおり、19世紀半ばにペカルスキイが18世紀ロシア語史のコンテキストの中で『手記』の言葉に注目していたし、1950年代にもП. В. ブルバによる先駆的な語彙分析(ただし、分類の指標は「庶民語」「地域語」「古語」「特殊な語彙」と単純である)⁽⁶²⁾が発表されていた。それらの仕事を引き継ぎながら、それらを越える仕事が生まれた。テキストの語彙ならびにシンタックスをブルバよりもはるかに緻密に分析したА. А. ラブレంచిエヴァの博士候補論文(1981)を皮切りに、ボロトフの語彙の中から人物の肯定的性格を意味する語彙を取り上げ、新時代の人間道徳の特徴づけにまで踏み込もうとしたИ. И. プシェニチニコヴァの、同じく博士候補論文(1990)へと大きく展開された。近年の成果はА. Е. Кузнецов「ボロトフ『手記』の庶民語」(2010)である⁽⁶³⁾。こうした『手記』の語彙・文体の特徴と「新しさ」を、18世紀後半からのロシア語史、さらに言語文化史の中で理解しようとする試みは、実は、先のシクロフスキイにあり、そして1930年代以降に活躍したロシア語研究者のВ. В. ヴィノグラードフ、Г. О. ヴィノクルの仕事にも通じるものである。後者のヴィノクルは「18世紀後半のロシア文章語」で述べる。「当時の貴

(60) Дворянская (2001). 新旧「ロシア・ウサーヂバ研究会」ならびに、その会の創始者として伝説的人物であるВ. В. Зуграに関しては、取りあえず、坂内(2012)を参照。

(61) Дворянская (2001: 250-254).

(62) Бурба (1953).

(63) Лаврентьева (1981), Пшеничникова (1990), Кузнецов (2010).

族、特に地方貴族の日常語は、いまだ18世紀後半にあつては、農民の方言とは決定的には違いはなかった。そのことを示すきわめて興味深い資料はボロトフの『手記』に見出すことができる」⁽⁶⁴⁾と、その意味で、研究自体の継続性はソビエト社会の中で、ひそかにではあるが、存在していたと考えられる。

IV. 新たなボロトフ理解に向けて

1980年代に始まったと言えるボロトフ「復権」は、その後、現在まで大きく展開し、その時々で数多くの成果をもたらしてきた。前章の最終節で、ジャーナリズム、郷土・地方文化論、庭園文化論、教育史、歴史学、そして言語（史）論といった多くの領域において精力的にボロトフならびに彼の『手記』が読まれ、使用されてきたことを述べたとおりである。

特に、1980年代以降、と時代を画したこと（一部は、それ以前に発表あり）に、あまり過剰な意味を込めるべきではない。だが、「ソビエト化」の浸透とそれと微妙な緊張関係を保ちながらも、革命前の研究成果を受け継ぎつつも「乗り越え」、1930年代まで問題提起的な仕事を継続していた人文研究が、1950-1970年代には文字通り「地下水」となって、なおも継承され、それが表層化したのが1980年代であるという認識が本稿の筆者にある。ボロトフの『手記』テキストの刊行と、それと深く呼応しつつも展開してきたボロトフ研究の historiography は、そのことを示す一事例となる。

こうした出発点に立って、近年のボロトフ、特に『手記』をめぐる研究の動向を見ると、顕著なのは、ボロトフの仕事・知的探究が関連する領域がきわめて多岐にわたるという理解がますます大きくなっていることである⁽⁶⁵⁾。『手記』は、もはや回想文学の専門研究に特化しえず、言語と言

(64) Винокур (1959 : 138-161)。

語（口承）文化，歴史と習俗，道徳と教育，建築・庭園等々へと「開かれ」，「拡散＝拡張」していくテキストとして捉えられつつある。そして，その軸となるのは，やはり文学研究と歴史・日常誌研究の二点ではないか。

通常の文学史の理解からすれば、『手記』が18世紀文学史の中で正面から取り上げられ，位置づけられるとは考えられない。たとえ，彼に未刊の詩作品や文学批評があり（一部，刊行），多くの文学者・詩人・知識人たちとの交流があったことを考慮したとしても，長大なメモアールそのものに狭義の文学史上の意味を与えることは，エピソードとして書かれたとしても，ほとんど不可能であろう。ただし，それは，18世紀（特に後半）のロシア「文学」，さらには言語文化の在り方自体を捉えなおす，あるいはロシア文学史そのものの再構築を目指すならば，別の様相を呈するはず

-
- (65) ボロトフ死後275年，生誕260年を記念したコンフェランス（1998年11月にレニングラード州ルーガ市にある国立農民大学で開催，主催者B. II. リャボフ）のテーマの柱は「ボロトフ——啓蒙者」「ボロトフ——ロシア最初のエコロジスト，自然科学者」「ボロトフ——ロシア農業科学の創始者」。また，2013年は生誕275年にあたったことから，旅行ブームを盛り上げ，観光客招致目的も含めた多くの行事がトゥーラ州をあげて盛大に行われた。2013年10月，トルストイ記念国立トゥーラ教育大学主催のコンフェランス「ボロトフの遺産と現代」が開催されたが，その主要テーマは以下の通り。「ボロトフ——科学と文化の活動家」「科学的分析の対象としてのボロトフの創造的遺産」「経済学者；彼の創造における経済哲学」「ロシアならびに世界の天文学の創始者」「美学・道徳的視点」「文学・歴史的遺産」「教育的遺産の価値論的核心」「現代青年の精神・道徳的教育の諸課題解決におけるボロトフの遺産の意義」「教育機関の教育システムにおけるボロトフの社会奉仕イデアの現実化」「現代的教育モデル構築におけるボロトフの遺産の応用的意義」「健康文化形成の文脈におけるボロトフの遺産の研究」「ボロトフと“ロシアの文化的巣”（ボゴロヂツクードヴォリャニノヴォ）」「ボロトフとトゥーラ地区の文化的トゥーリズム」「ボロトフ遺産の国際的意義と国際的協力の可能性」，「インターディシプリナリイ」としたが，これがソ連期に使用されていた「統合的研究」とどのように関連するかを考える必要がある。

である。ボロトフの時代には、貴族と民衆との間に言語・文学の「格差」はさほど明確でなく、文語と口語、都会語と地方語の「区別」も明瞭ではない「文化的 diglossia」状態にあった。いまだロシアの「散文」は成立していなかったから、西欧を模倣して小説を書こうとしても、書きたいという思いを条件化し、それを実現していくツールとしての言葉と「文体」を準備していく状況には、未だ到達していなかった。あるのは、書きたい、書かねばいけないという衝動と、目と脳裏に浮かんだモノは何でも書くというディシプリンとイデーである（ラエフによれば、ボロトフは「書き中毒症 graphomania を病んでいた」⁽⁶⁶⁾）。

18 世紀半ばから 19 世紀初頭にかけて、ボロトフ『手記』が書かれた言語文化史的状況がそのようなものであったとすれば、『手記』の文学（史）的意義は、これまでとは別のレベルで考えられなくてはならない。そのことを考える上で参考になる、ごく最近の仕事の例は、一つは、上で触れた言語（史）研究の成果（クズネツォフ他）であり、また、A. K. デミホフスキイ「1780-1790 年代の A. T. ボロトフの文学的創造 文学・美学的探究の形成の問題に向けて」（2002）、ヴェセロヴァ「A. T. ボロトフと П. 3. ホミャコフ ロマンそれともメモアール？」（2002）、A. A. バフチナの博士候補資格論文「20 世紀ロシア文学作品における A. T. ボロトフのメモアール主人公の主題と性格の変形」（2013）であろう⁽⁶⁷⁾。特に、バフチナの論文に注目したい。そこでは、本稿で行われたように、『手記』刊行の 19-20 世紀の歴史とその特徴が概観され、『手記』がどのように受容されたか（第一章）、続く第二章では A. ブロークの「ボロトフとノヴィコフ」、第三章では例のシクロフスキイによる「物語」（1928）が分析対象とされ、さらに第四章では、20 世紀後半の複数の作家による「芸術的改作」について述べられている。特に、第三、四章は、後世の作品が『手記』テ

(66) Raeff (1973 : iii).

(67) Демиховский (2002), Веселова (2002), Бахтина (2013).

クストをどのように変形して作られたのか、という分析を含み、『手記』研究の新たな試みとして興味深い。オリジナルのメモアール・テキストにたいして、(後世の) 著者がいかに「介入」するのか、そのレベルと方法はどのようなものか、それは「再話」ではなく「芸術的変形」と呼ばれるべきものであり、この変形は作品が書かれた歴史的時間と著者の創作上の課題に従っていることが、具体的な例示とともに説明されるのである。この著者も指摘するとおり、この問題は『手記』テキストを「歴史的証言」とするか、「芸術作品」として捉えるかという「古くて新しい」問題に通じることから、著者は、西欧、特にフランスの新旧アナール派による「個人史」をめぐる仕事も理論面では参照しながら、『手記』ならびにシクロフスキイのテキストに向き合おうとするのである。

「歴史的証言」か、あるいは「文学作品」か、という問いかけを前にしたとき、歴史学研究の『手記』へのアプローチは同じ課題、あるいは表裏一体の問題を抱えている。18-19 世紀のロシアで書かれた莫大な量のメモアール(未刊も含む)の全体像を描こうとした歴史家 A. I. タルタコフスキイによるまでもなく、メモアールがもっとも貴重な歴史的証言を含むことは間違いない⁽⁶⁸⁾。ただし、『手記』から研究者の興味を惹く証言を、断片的に引用する、あるいは「切り刻む」のではなく、テキスト全体がどのようなメッセージを現代の我々に伝えようとしているのか、そのための理論武装とスタンスとして何が必要か、を整理し、概念化した上でテキストと向き合うこと——それこそが、現代の歴史研究に求められているはずである。その点で、1980 年代半ばのベレストロイカ期から急速にソ連にも浸透していったアナール派その他の「心性史」「個人史」をはじめとした

(68) 現代ロシアの爆発的な出版文化の中で、一般読者向けの歴史読み物、回想記はベストセラーとなって、ある種のブームを起こし、ロシアのみならず世界中の著名人の手になる回想録が書店の本棚を埋め尽くしている。タルタコフスキイを参照するまでもなく、ロシアはメモアール(ならびに自伝・伝記)「大国」であったし、今後もそうかもしれない。

理論的枠組みが積極的に受容されたことは大きな成果である。ただし、現代ロシアの歴史学研究にあって、かつての強力な理論的・イデオロギー的核心が存在しない現状で、それに代わる「中心軸」を求めるのは性急であろう。その意味で、歴史の細部の具体に着目する「日常生活・習俗誌」研究の動きが歴史研究の中で際立つのは、もちろん「流行り」との感もあるとはいえ⁽⁶⁹⁾、認めていかなければならない。一例は、ボロトフの息子パーヴェルが書き残して、これまで未刊だった「1787年卓上暦」の刊行(2006)である。文字通り日々の、日常生活のごく当たり前の仕業が平明に記された原稿のていねいな復刻と詳細なコメントリーは、父ボロトフの活動に関する信頼できる証言として参照するだけでなく、ここからいかなる細部を「切り取り」、歴史を再構成していく契機とするのか、その際にどのような理論を組み立てていくかをトレーニングする上でも貴重である⁽⁷⁰⁾。こうした動きは今後のボロトフ研究に影響をもたらすはずである。その中で、ボロトフの『手記』は、これから、いかなる読者(すでに述べたとおり、『手記』の各部分はいつも「親愛なる友よ」で始まる)を獲得し、どのような読まれ方をされていくのだろうか。

ボロトフが生きた18世紀後半から19世紀前半にかけての時期は、ロシアの社会と文化が明確に姿を現わしていく時代、言い換えれば、「ロシア文化」が実体としても、言説としても形成されていく「転換期」である。筆者が関心を持つロシア民俗学史の観点からすれば、ナロードがその「顔」を見せ、形と表象とが同時に明らかにしていく(「ナロードの神話」

(69) 「若き親衛隊」社が刊行中のシリーズ「生きた歴史 人間の日常生活」の多くの巻を参照のこと。

(70) 編著者のC.A.コズロフは、同書(Козлов, 2006)に先立って刊行した『啓蒙期ロシアの旅行者たち』(Козлов, 2003)で、第五章を「貴族の巢を捨てることなく、旅行する」と題して、ボロトフ父子の生活ぶりの記述にあてている。

が生まれた)時代である。それはナロードそのものの問題に収まるはずはなかった。ナロード認識を占有的に担うべくインテリゲンツィヤが誕生し、彼らが一方で、西欧の学・研究をごく短期間に受容しながら、ロシアの知と精神の在り方を問い、そのために多くの議論と実績・成果が生まれる時代でもあった。学・研究と創作活動は個人の「趣味」ではなく、「国家的・社会的使命」を担うべきものとされたから、その活動を選択した人々は、必然的に国家権力とさまざまな形で「対峙」することを求められた。ある者は、時に宮廷・桂冠詩人、時に外国文献翻訳者、時に最大の崇敬を受ける者となり、権力の意志に反逆した場合には、道化として嘲笑され、時に処罰を、死刑宣告を受けるか、投獄・追放される運命に耐えざるを得なかった。トレヂャコフスキイ、ロモノソフ、ノヴィコフ、ラヂーシチェフといったロシアの知の「巨人」が18世紀半ばから忽然と生まれ、活躍したのは、こうした背景の下である。「片田舎に引き籠った自由人」が日々と過去の出来事を「徒然に」記した『手記』も、「巨人」の著作として時代を越えて読まれていくはずである。

参考文献

- Азадовский (1958) Азадовский М. К. История русской фольклористики. Т. 1. М.
- Андреев (1843) Андреев Н. Дополнение к 1 статье «Прогулка по Туле и путешествие по ее окрестностям. Москвитянин, Т. 3, № 5.
- Аурова (2007) Аурова Н. Н. Образ жизни русского дворянина XVIII века (по материалам домашних библиотек). В кн.: Российская реальность конца XVIII-первой половины XIX в. М.
- Афанасьев (сост., 1988) Афанасьев А. Д. А. Т. Болотов. Библиографический указатель. Тула.
- Байбурова (1980) Байбурова Р. М. Русский усадебный интерьер эпохи классицизма. Планировочные композиции. В кн.: Памятники русской архитектуры и монументального искусства. М.
- Бахтина (2013) Бахтина А. А. Трансформация сюжета и характера героя

- мемуалов А. Т. Болотова в произведениях русской литературы XX века. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. Нижний Новгород.
- Бердышев (1988а) Бердышев А. П. Андрей Тимофеевич Болотов-выдающийся деятель науки и культуры. 1738-1833. М.
- Бердышев (1988б) Бердышев А. П. Андрей Тимофеевич Болотов. Основоположник русской сельскохозяйственной науки. М.
- Бердышев (2001) Бердышев А. П. История музея-усадьбы А. Т. Болотова «Дворяниново». Тула.
- Беспалов (1988) Беспалов Ю. В. Андрей Тимофеевич Болотов-испытатель природы. Пущино.
- Биография Болотова (1838) Биография Андрея Тимофеевича Болотова с замечаниями сына, эпитафией, автографом письма и его переводом. Земледельческий журнал, 1838, № 5. (репринт. изд., Тула, 1997)
- Блок (1904) Блок А. А. Болотов и Новиков. В кн.: Блок А. А. Собрание сочинений, Т. 11. Л., 1934.
- Болотов (1870-73) Болотов А. Т. Жизнь и приключения описанные самим им для своих потомков. Приложение к «Русской старине». Т. 1-4. СПб.
- Болотов (1875) Болотов А. Т. Памятник протекших времен, или Краткие исторические записки о бывших происшествиях и носившихся в народе слухах, 1796. М.
- Болотов (1930) Болотов А. Т. Жизнь и приключения описанные самим им для своих потомков. «Молодая гвардия». М.-Л.
- Болотов (1931) Болотов А. Т. Жизнь и приключения Андрея Болотова. Т. 1-3. «ACADEMIA». М.-Л. (репринтное изд., М., 1993)
- Болотов (1986) Болотов А. Т. Жизнь и приключения Андрея Болотова, описанные самим им для своих потомков. «Современник». М.
- Болотов (1988) Болотов А. Т. Записки Андрея Тимофеевича Болотова 1737-1796. Т. 1-2. Тула.
- Болотов (1993) Болотов А. Т. Жизнь и приключения Андрея Болотова, описанные самим им для своих потомков. Т. 1-3. «ТЕРРА». М.
- Болотов (1873) Болотов М. П. Андрей Тимофеевич Болотов (1737-1833). Русская старина, 1873, № 11.

- Боровских (сост., 1984) Боровских И. В. Андрей Тимофеевич Болотов. Материалы к биобиблиографии деятелей сельскохозяйственной науки. М.
- Бурба (1953) Бурба П. В. Особенности лексики «Жизни и приключений Андрея Болотова». Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. Киев.
- Веселова (2000) Веселова А. Ю. Эстетика Андрея Тимофеевича Болотова: Литературная критика и садово-парковое искусство. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. СПб.
- Веселова (2002) Веселова А. Ю. А. Т. Болотов и П. З. Хомяков. Роман или мемуары? XVIII век, сб. 22. СПб.
- Виноградов (1935) Виноградов В. В. Язык Пушкина. М.
- Виноградов (1938) Виноградов В. В. Очерки по истории русского литературного языка XVII-XIX вв. М.
- Винокур (1959) Винокур Г. О. Избранные работы по русскому языку. М.
- Водовозов (1960) Водовозов Н. В. А. Т. Болотов-писатель XVIII века, Ученые записки Московского городского педагогического института. Т. CVII, каф. рус. лит-ры, вып. 10.
- Ганичев (1986) Ганичев В. Н. Тульский энциклопедист. Тула.
- Гаспаров (2006) Гаспаров М. Л. Из неопубликованного. Вопросы литературы, 2006, № 2.
- Глаголева (1988) Глаголева О. Е. А. Т. Болотов-ученый, писатель, энциклопедист. Вопросы истории, 1988, № 11.
- Гриц (1929) Гриц Т., Тренин В. и Никитин М. Словесность и коммерция. М.
- Губин (сост., 1990) Губин А. Б. и Исаев И. В. А. Т. Болотов в Кенигсберге. Из записок А. Т. Болотова. Калининград.
- Гулыга (1980) Гулыга А. В. Искусство истории. М.
- Дворянская (2001) Дворянская и купеческая сельская усадьба в России XVI-XX вв.: Исторические очерки. М.
- Демиховский А. К. (2002) Литературное творчество А. Т. Болотова 1780-90-х гг. XVIII в.: К проблеме формирования литературно-эстетических

- исканий. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. Коломна.
- Евгений (1805) Евгений Митр. Продолжение нового опыта исторического словаря о российских писателях. Друг просвещения, 1805, № 7.
- Кенигсберг (1990) А. Т. Болотов в Кенигсберге: Из записок А. Т. Болотова, написанных самим им для своих потомков. Калининград.
- Киселев (1870) Киселев Н. С. Заявление. Письмо к издателю «Русского архива». Русский архив, 1870, № 12.
- Козлов (2003) Козлов С. А. Русский путешественник эпохи Просвещения. СПб.
- Козлов (2006) Козлов С. А. Русская провинция Павла Болотова: «Настольный календарь 1787 года». СПб.
- Кошелева (2000) Кошелева О. Е. «Свое детство» в древней Руси и в России эпохи Просвещения. М.
- Кретинин (1996) Кретинин Г. В. Под Российской короной, или Русские в Кенигсберге. 1758–1762. Калининград.
- Кузнецов (2010) Кузнецов А. Е. Просторечие в «Записках» А. Т. Болотова. Русская речь, 2010, № 2.
- Лаврентьева (1981) Лаврентьева А. А. Язык А. Т. Болотова. Лексика и синтакс. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. М.
- Лазарев (1977) Лазарев В. Я. Тульские истории. Тула.
- Лазарев (1978) Лазарев В. Я. Сокровенная жизнь. М.
- Лазарчук (1988) Лазарчук Р. М. Болотов, Андрей Тимофеевич. Словарь русских писателей XVIII века. Вып. 1 (А–И). Л.
- Лихачев (1982) Лихачев Д. С. Поэзия садов. Л. (ドミトリイ・セルゲエヴィチ・リハチョフ 『庭園の詩学——ヨーロッパ, ロシア文化の意味論的分析』 坂内知子訳, 1987 年, 平凡社)
- Любченко (1984) Любченко О. Н. Есть в Богородицке парк. Тула.
- Любченко (1988) Любченко О. Н. А. Т. Болотов. Тула.
- Меньшикова (2006) Меньшикова А. Л. Мемуары об обучении крестьянских детей в России XVIII в. М.
- Милюков (1995) Милюков П. Н. Очерки по истории русской культуры в

- 3-х томах. Т. 3. М.
- Миров (1991) Миров Л. В. А. Т. Болотов-автор крестьянской энциклопедии. Вопросы истории, 1991, № 7-8.
- Миров (2006) Миров Л. В. Великорусский пахарь и особенности российского исторического процесса. М.
- Морозов (1933) Морозов И. и Кучеров А. Из неизданного литературного наследия Болотова. Литературное наследство, № 9-10. М.
- Николози (2007) Николози Р. Микрокосм нового: Кунсткамера, Петербург и символический порядок Петровской эпохи. Петр Великий. Сост. и ред. Е. В. Анисимов. М.
- Новиков (1774) Новиков Н. И. Опыт исторического словаря о российских писателях. СПб. (факсимильное изд., М., 1987)
- Новиков (1983) Новиков С. Болотов, М.
- Новиков (1992) Новиков С. А. Т. Болотов: «Не все всходит, что посеется...». Сеятели и хранители. В двух книгах. Кн. 1. М.
- Панченко (1984) Панченко А. М. Русская культура в кануне петровских реформ. Л.
- Пекарский (1855) Русские мемуары XVIII века. Современник 1855, т. 1, отд. 2; т. 52, отд. 5.
- Подольский (сост., 1988) Русские мемуалы. Избранные страницы. XVIII век. М.
- Полякова (2011) Полякова М. А. и Савинова Е. Н. Русская провинциальная усадьба. XVII-начало XX века. М.
- Приказчикова (2009) Приказчикова Е. Е. «Возделывая свой сад»: утопия естественного существования человека эпохи просвещения в пространстве садово-парковой культуры на примере «Жизни и приключений...» А. Т. Болотова. Вестник Российского государственного университета, 2009, вып. 8.
- Приходько (1988) Приходько В. Е. Андрей Тимофеевич Болотов-выдающийся естествоиспытатель XVIII века. Пущино.
- Пшеничникова (1990) Пшеничникова И. И. Культурно-значимая лексика в русском языке нового времени (Нравственная характеристика человека в произведениях А. Т. Болотова). Автореферат диссертации на

- соискание ученой степени кандидата филологических наук. Л.
- Рогожин (сост., 1986) Столетье безумно и мудро. Век XVIII. М.
- Ронский (1931) Ронский С. М. Болотов и его время. В кн.: Болотов (1931). Русский быт XVIII века. Ч. 2. (1919)
- Русский быт (2012) Русский быт в воспоминаниях современников. XVIII век. М.
- Сборник трудов (1999) Сборник трудов межрегиональной научно-практической конференции, посвященной 260-летию со дня рождения А. Т. Болотова. СПб.
- Святловский (1923) Святловский В. В. История экономических идей в России. Пг.
- Семевский (1871) Семевский М. И. Предисловие. В кн.: Болотов (1870-73).
- Семевский (1879) Семевский М. И. О. М. Бодянский (Некролог). Русская старина, 1879, № 5.
- Степанов (сост., 1968) Степанов В. П. и Стенник Ю. В. (сост.) История русской литературы XVIII века. Библиографический указатель. Л.
- Тартаковский (1991) Тартаковский А. Г. Русская мемуалистика XVIII-первой половины XIX в. М.
- Тартаковский (1997) Тартаковский А. Г. Русская мемуалистика и историческое сознание XIX века. М.
- Толмачев (1992) Толмачев А. Л. Архив семьи Болотовых. Археографический ежегодник за 1990. М.
- Толмачев (1998) Толмачев А. Л. Критические заметки к библиографии трудов А. Т. Болотова. В кн.: Сборник трудов (1999)
- Тулупов (2000) Тулупов В. Н. Идеальная модель русской усадьбы последней трети XVIII века в трудах А. Т. Болотова. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата архитектуры. М.
- Филиппова (2011) Филиппова Н. А. А. Т. Болотов-создатель русского усадебного сада. Русская усадьба, вып. 16 (32). СПб.
- Чечулин (1889) Чечулин Н. Русское провинциальное общество во второй половине XVIII века. СПб.
- Шкловский (1928) Шкловский В. Б. Краткая и достоверная повесть о дворянине Болотове. Красная новь, 1928, № 12.

- Щеблыкина (1996) Щеблыкина И. В. А. Т. Болотов и его система ценностей. Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата исторических наук. М.
- Щеблыгина (1999) Щеблыгина И. В. Нравственная позиция А. Т. Болотова в системе его ценностных ориентаций. В кн.: Человек эпохи Просвещения. М.
- Щеблыгина (2003) Щеблыгина И. В. А. Т. Болотов и русская дворянская усадьба второй половины XVIII–начала XIX века. В кн.: А. Т. Болотов; Гармония мира и души. М.
- Щепкина (1890) Щепкина Е. Н. Старинные помещики на службе и дома: Из семейной хроники (1578–1762). СПб.
- Щепкина (1897) Щепкина Е. Н. Болотов, Андрей Тимофеевич. В кн.: Венгеров С. А. (сост.) Критико-биографический словарь русских писателей и ученых, т. 5. СПб.
- Щукина (2007) Щукина Е. П. Подмосковные усадебные сады и парки конца XVIII века. М.
- Bolotow (1990) Bolotow A. Leben und Abenteuer des Andrej Bolotow, von ihm selbst für seine Nachkommen aufgeschrieben. 2 vol. Munich.
- Brown (1977) Brown J. H. A Provincial Landowner: A. T. Bolotov (1738–1833) Princeton university. Ph. D.
- Cracraft (2003) Craft J. The Revolution of Peter the Great. Harvard UP.
- Newlin (2001) Newlin Th. The Voice in the Garden: Andrei Bolotov and the Anxieties of Russian Pastoral, 1738–1833. Northwestern UP.
- Raef (1966) Raef M. The Origins of the Russian Intelligentsia: The Eighteenth-Century Nobility. New York.
- Raef (1973) Raef M. Introduction to republished edition (1973). Болотов (1931).
- Rice (1976a) Rice J. L. The Memoirs of A. T. Bolotov and Russian Literary History. Russian Literature in the Age of Catherine the Great. Oxford.
- Rice (1976b) Rice J. L. The Bolotov Papers and Andrei Timofeevich Bolotov, Himself. Russian Review 35, No. 2.
- Roosevelt (1995) Roosevelt P. Life on the Russian Estate: A Social and Cultural History. Yale UP.

- 佐藤 (2006) 佐藤千登勢『シクロフスキイ 規範の破壊者』南雲堂フェニックス
- 土肥 (2010) 土肥恒之「なぜ農民の歴史を学ぶのか」『ロシア社会史の世界』日本エディタースクール出版部
- 坂内 (2012) 坂内徳明「1920年代のソ連におけるロシア貴族屋敷の研究——V. V. ズグラと OIRU の活動——」『言語文化』(一橋大学 語学研究室) 第49巻
- 坂内 (2013) 坂内徳明「ロシア貴族屋敷 (ウサーヂバ) のエンサイクロペディスト アンドレイ・T・ボロトフのこと」『言語文化』(一橋大学 語学研究室) 第50巻
- ブレーデカンブ (2010) ホルスト・ブレーデカンブ『モナドの窓——ライブニッツの「自然と人工の劇場」——』(原研二訳) 産業図書
- マーカー (2014) ゲーリー・マーカー『ロシア出版文化史 18世紀の印刷業と知識人』(白倉克文訳) 成文社